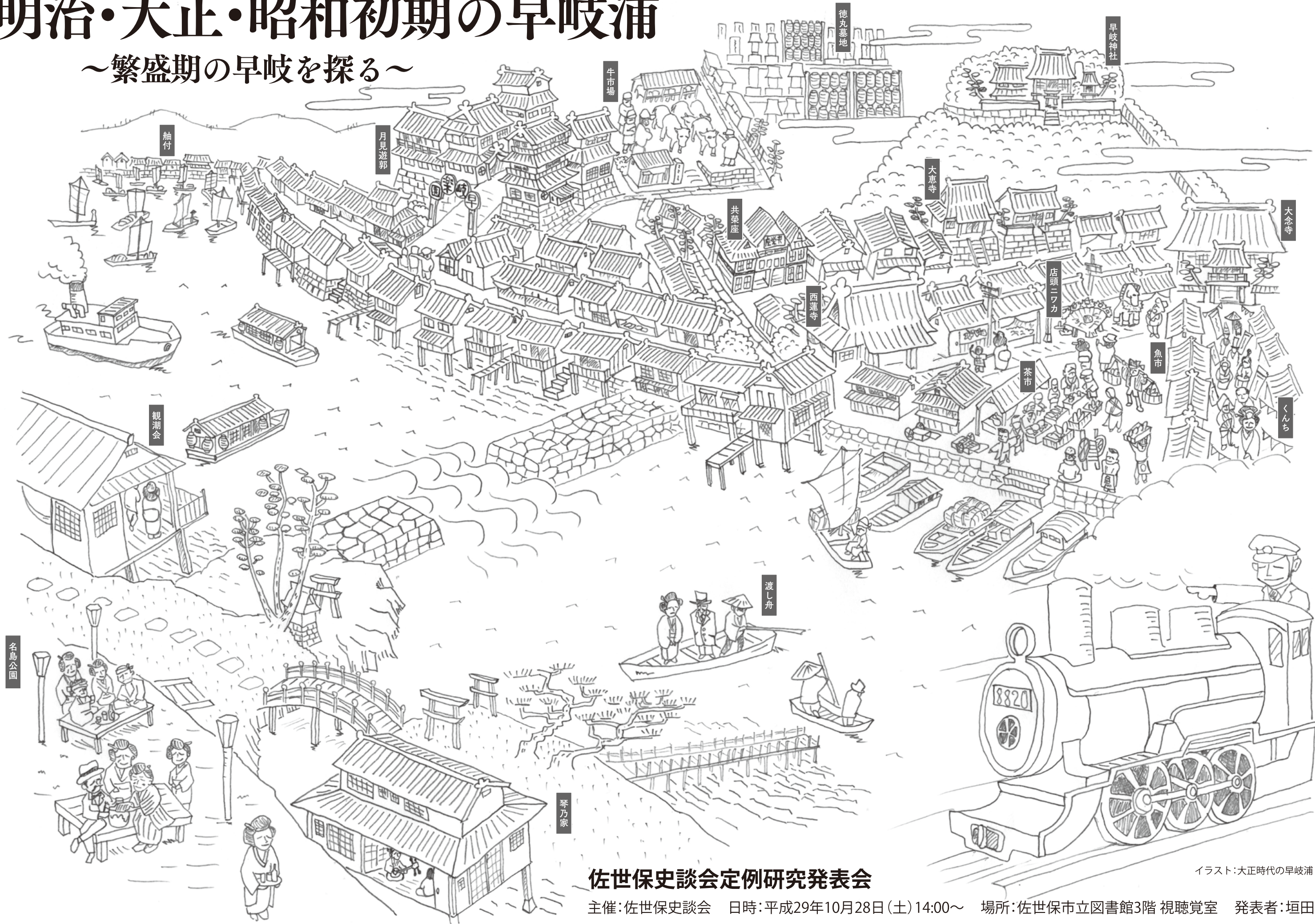


明治・大正・昭和初期の早岐浦

～繁盛期の早岐を探る～



佐世保史談会定例研究発表会

主催：佐世保史談会 日時：平成29年10月28日(土) 14:00～ 場所：佐世保市立図書館3階 視聴覚室 発表者：垣田 鉄郎

イラスト：大正時代の早岐浦



絵で見る大正初期の早岐の街並

作製：
平成元年8月、親和銀行早岐支店



創立50周年



ふれあって 未来へ。

親和銀行

早岐支店

明治30年～昭和初期頃を通しての各施設店舗一覧

一定の時期を表したものではありません。

早岐駅 早岐警察所 早岐役場 検番 裁判所 郵便局 早岐銀行 殖産銀行 共榮座(劇場) 公設市場 まるは運送 配給所 陶土陸揚場 鉄道官舎	呉服屋 橋口(東町) 宮地(東町) 空閑(東町) 山本(東町) 吉村(中町) 三原(中町) 富野屋(西町) なかでも富野屋は一番大きな店舗を有し、早岐では只一つ製造工場としての織物工場を大正七年に陣の内に創設し、従業員五、六十人以上を抱え、一時は盛大なものであった。 更に大正・昭和(初期)の頃、次々と増えてゆき、古賀・三原・鴨川と町の中で重要な位置を占める店が出来てきた。	カマボコ屋 丸太(中町)	印刷屋 一瀬(戸上) 立石(西町、後の福留) 真弓(中町)	医院 今村 山下 立石 橘川 村上 川尻 ●
神社仏閣 早岐神社 大念寺 大恵寺 西蓮寺	指物屋 小島(中町)	乾物店 山口屋	表具商 一瀬(田子浦)	眼科 中村 川尻
旅館 日吉屋(駅前) 橋本屋(駅前) 三河屋(駅前) 久保田屋(駅前) 佐賀屋旅館(築町) 鹿島屋(寿町) 川口屋(寿町) 藤本旅館(寿町) 丸正(寿町) 一二三旅館(寿町) 万徳屋(寿町) 藤津屋(東町) 小松屋(東町) 山口屋(西町) 力武(西町) 大正館(田子浦) 朝日屋 角屋(田子浦) 開屋(飲食とも)	洋品店 田口洋服店(寿町) 金ヶ江仕立屋(中町) 住吉屋(中町) 原昌(中町) 中路洋服店(田子浦)	菓子舗 琴湖堂(駅前) 緒方(飴屋)(寿町) 島屋(東町) ● 山口菓子屋(東町) 古賀(東町づぼら堂) 岩崎(西町) 伊東(田子浦) 富永製菓(西町)	金物屋 木原(中町) ● 酒見(西町)	歯科医院 渡辺 ● 飯世 稻沢
遊郭 思楽亭(田子浦) 今茂(田子浦) 松鶴楼(田子浦) 三階楼(田子浦) 万歳楼(田子浦) 一楽楼(田子浦)	酒屋 高田(駅前) 春企の醸造元村山(東町) 牟田(東町) 川口(東町) 山崎(寿町) 山口(寿町) 天野(中町) ● 坂口(中町) 浦本(田子浦) ●	食堂 丸徳食堂(駅前) 泉屋食堂(駅前) ？食堂(築町) ？食堂(東町) 橋口うどん(中町) 四海楼(西町)	黑板屋 久保(駅前)	産婦人科 江田
風呂屋 迎(田子浦)	精米業者 山口米店(駅前) 近藤精米所(東町) 洩精米所(東町) 松井(後の吉村)(中町) 峰精米所(西町) 古沢(西町) 永谷製米所(田子浦) 江原米店(田子浦)	まんじゅう屋 土井(寿町) 有馬(東町) 徳富(田子浦) 杉永(田子浦)	度量器店 森	薬店 久保田(東町) 森喜(東町) 有田(中町)
	醤油 一瀬(西町) 小寺(田子浦) ●	文具 開運堂 宗像文具店(東町)	紙屋 早田(文具店とも)(東町)	床屋 西川 今里
	魚屋 松下(くじら店)(寿町) 谷村(東町) 高倉(東町) 北川(中町) 横石(中町) 古賀(田子浦) 加茂里屋	こんにゃく 溝口(茶屋も)(寿町) 板谷(中町)	たばこ屋 近藤(寿町) 佐々木煙草卸 坂本(田子浦) ？(田子浦)	写真館 田中(寿町) 丹羽
	豆腐店 浦上(築町)	肥料店 板田(築町)	繭(まゆ)業 前川(寿町) ●	時計屋 上滝(東町) 岩永(東町) 田家(中町)
	材木屋 野田材木店 野口製材 椎葉(西町) 今里(田子浦)	織物工場 (築町)	提灯屋 宮田(寿町) 久保田 ●	新聞店 真弓(中町)
	廻漕店 針屋(西町)	傘 小柳(寿町)	印鑑屋 三浦(寿町)	下駄屋 小柳(築町)
	ガラス屋 池上(寿町) 椎葉(西町)	自転車屋 本山(築町) ●	船具店 原田(東町) 一ノ瀬(中町)	釣具店 一ノ瀬(田子浦)
	小間物店 管(田子浦) 森山(田子浦)	洗張店 本田(築町)		

《目次》

はじめに

1. 汽車と船

2. 遊郭

3. 祭事

4. 市

5. 災害

6. 観潮橋と名島公園

《参考資料》



早岐の街百年「栄枯盛衰物語」
平成2年7月31日 発行
筆者：富永福男氏



早岐商工会創立60周年「記念誌」
昭和55年3月 発行



早岐郷土史概説
平成6年3月 発行



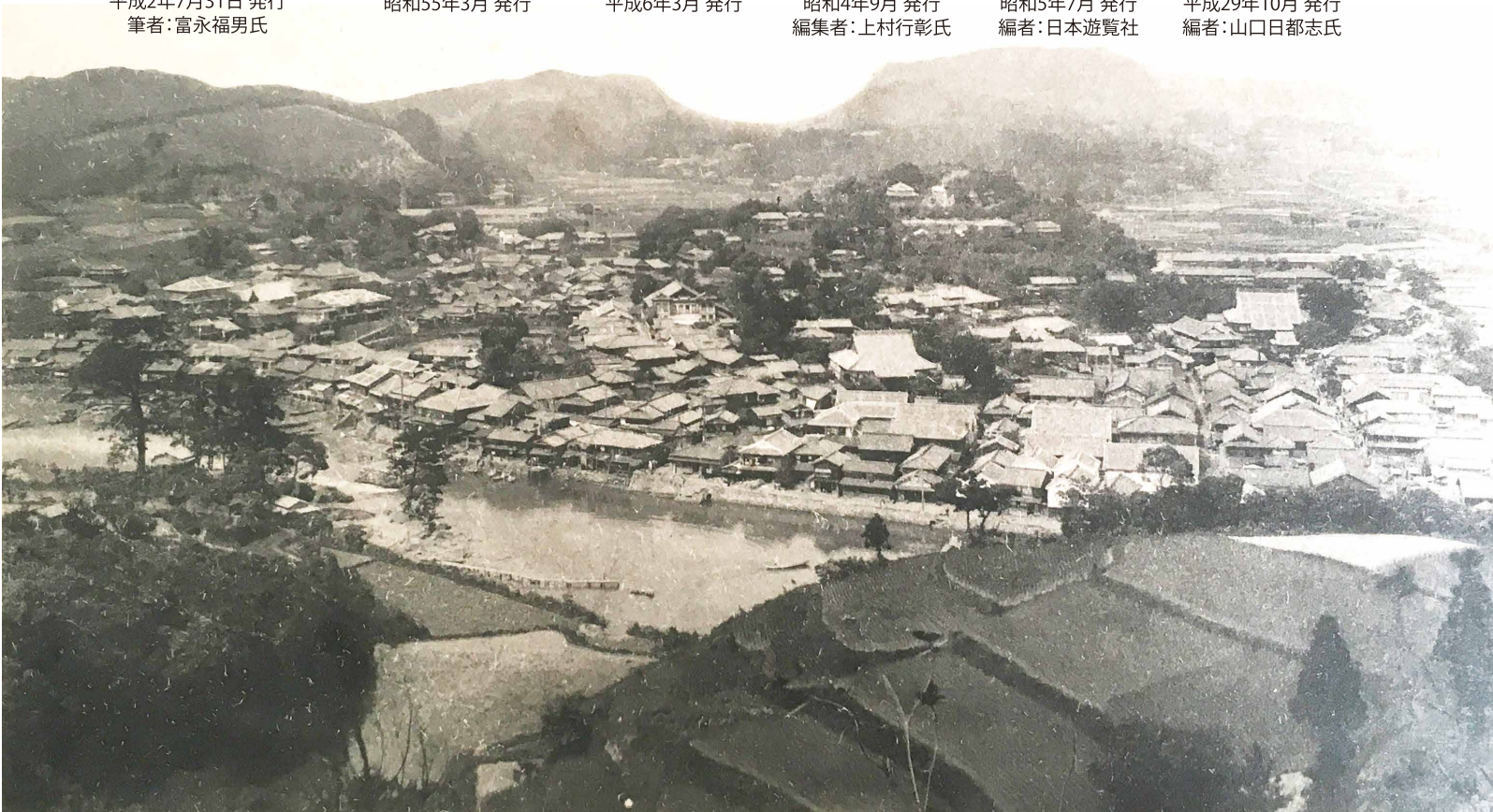
日本遊里史
昭和4年9月 発行
編集者：上村行彰氏



全国遊郭案内
昭和5年7月 発行
編者：日本遊覧社



佐世保遊里考
平成29年10月 発行
編者：山口日都志氏



大正12年頃の早岐(八天神社より)

始めに

早岐と言えば江戸時代には本陣と脇本陣が置かれ、平戸藩内でもいち早く干拓が行われ所であり、町は石畳で整備され宿場町として栄えた。上五島などの足がかりの場として市場が開かれ多くの商人が集まった。特に和歌山・大阪・瀬戸内海沿岸の商人が多く、その商人たちは物資と共に上方文化も早岐の町に持ち込んでくれた。

早岐神社裏手にある**芭蕉塚(胡蝶句碑)**と呼ばれる大きな石碑がある。碑の由来は文字が摩耗し読むのは困難であるが、読める文字から憶測すると「二毛堂子」と呼ばれる大阪の俳人を師とする早岐浦町人の発句の会が芭蕉の没後百三十年の祥月命日にあたる日に記念に建てたのであろう。碑には芭蕉の句が刻まれている。当時の早岐町人の風流を楽しむ余裕と立派な石碑を建てる経済的な豊かさが感じられる。

同じく早岐神社の拝殿右奥にある**金刀比羅宮**の石の祠には嘉永元年(1848)建立の銘があり、それを取り囲む玉垣には奉献者である関西、瀬戸内各地の商人、船主の名が刻まれており、早岐港の交流の広さや繁栄ぶりを伺い知ることができる。またその奥には立町にあった朝廣天満宮の鳥居(明治30年に現在地へ)があり、瀬戸内の商船名や商人の名が刻まれている。

西蓮寺の過去帳に、**西町、戸ノ上町、立町、新町、出来町、カケ町、東町、築町、寿町、土井町**などの町の名が見られる。延享三年(1745)の大火では**家屋150戸**が焼失、13年後の宝暦八年(1758)に再び起きた大火では**家屋194戸土蔵4戸が焼失**したとの記録がある。この記録は早岐の当時の町割りと戸数の一端を示すもので、これらの記録からすると江戸時代中頃の早岐は城下町の平戸に次ぐ藩内第2の大きな町だったようである。

もっと時代をさかのぼれば、今から2,300年ほど前の弥生時代には人が住み着いていた事が大念寺から出た遺跡でわかっている。大念寺では古墳時代の遺跡も出土しており、その時代には三島に古墳も作られている。

奈良時代に書かれた**風土記**には景行天皇時代(西暦71年)頃、速来村という所に土蜘蛛と呼ばれる土民の長に**速来津姫**がいたと書かれており、速来村とは早岐のことだと言われている。また平安時代になると三島に**経塚**が作られる。そこには当時としては大変貴重であった中国製の器や銅鏡が治められており、この時代にも有力者がいたことがわかる。

中世になると松浦党の一族である**山代氏**が早岐を治め早岐氏と名乗る。他にも弘安八年(1285)早岐又三郎清、永仁七年(1299)早岐藏人広能、元徳二年(1330)早岐五郎藏人入道、至徳四年(1387)早岐伊豆守源義実といった早岐と名乗る武士の名が文献に残されている。

早岐神社の前身である熊野神社に寄進された青銅鏡には「**永享八年(1436)早岐城主源義信再興し、神鏡三個奉納**」の旨が刻まれており、この時代、源義信という名の小名主が早岐を支配していたことを示している。その頃の早岐は各勢力の領土の境目であり、大村から武雄の後藤氏そして平戸松浦氏へと領主が次々に変わっている。最終的には広田城の戦で大村などの連合軍が撤退し、平戸松浦氏の領土となり、藩政時代を迎える。この広田城の戦いの時に「早岐には松浦隆信の三男惟明を配した」との記録が有り、おそらく現在早岐神社がある丘も平戸の出城として使われていたのではないかとと思われる。

このように早岐には古代から連綿と人が住み着き、現在の早岐神社がある愛宕山の麓一帯を生活の場として暮らし、目の前に広がる瀬戸の豊かな自然の幸を生活の糧にして、独特の文化を育んできた。今回はそのような早岐のもっとも活気があったであろう時代の話をしたいと思う。

やがて江戸時代が終わり、幕末から明治になり早岐の町も大きく変わる。本陣・脇本陣や継場(つぎば)などの宿場の諸施設は廃止され、番所も廃止されたことで交通運輸が自由になると、海陸交通の要地である早岐はよりいっそう賑やかになった。このため新しい交通運輸機関として明治7年(1874)に**早岐陸運会社**が設立された。

〈運賃〉 一里(約4km) 人足 **5銭** 腕車(明治13年～) **18銭**
馬 **10銭**

鉄道が開通するまでこの地方唯一の陸上の交通機関として重要な役割を果たした。

商人の気質なのか、早岐の人々はそのような大きな時代の変化の流れに上手くのっかる人が多いいた。特に医学、文学、経営の分野で優秀な人材が生まれている。**牧山有格**という人物は明治15年に、江戸時代の押役所跡に早岐企業会社を設立し、地元の為の融資を行った。この会社が**早岐銀行**そして**佐世保銀行**へと名称を変え、現在の**親和銀行**へと発展した。いわば佐世保の銀行の父ともいえる人物である。

そういった幕末から明治へかけてのあらゆる変化の中で、早岐にとって最も大きな出来事はやはり鉄道の開通であった。

1. 汽車と船

早岐駅

明治23年(1890)、日本海軍の根拠地として全国に4箇所(横須賀・呉・舞鶴)しかないうちの一つに佐世保が選ばれ、鎮守府が開庁した。艦船が出入りする軍港都市として佐世保市が発展する余波を受けて早岐の街は更に発展する。

軍港建設のための工事が始まり合わせて鉄道が長崎本線から分岐され、佐世保線が敷かれることになった。その分岐点として**早岐駅**が生まれた。早岐駅は**明治30年(1897)に開業**する

商工会の調査記録に大正15年(昭和元年)(1926)の早岐駅の年間乗客数は**404,395人**とある。1日平均すると**約1,108人**ほどの乗車人数だった。昭和62年から平成22年までの早岐駅の年間乗車客数の推移をみると大体40万から50万人の間を行ったり来たりしてさほどの変化はない。当時から現在とさほど変わらない乗客数だったということは、当時としては多い乗客数ではないだろうか。ちなみに2016年はおよそ**600,790人**と近年は徐々に増えているようだった。



建設中の早岐駅(明治30年頃)

■早岐駅開業当時(明治31年～)の早岐一佐世保間の運賃

3等= 6錢6厘	2等= 9錢9厘	1等=13錢2厘
----------	----------	----------

※1マイル(1.6k=1600m)

■その他の交通運賃(早岐一佐世保間)片道

馬車 = 13錢	汽船 = 18錢	人力車 = 5~60錢
----------	----------	-------------

船

江戸以前より早岐への人や物資の主な運搬ルートは航路であった。航路によって早岐の町は開けたと言ってもよい。早岐駅ができる以前の明治20年(1887)の早岐港の年間出入船舶は**3600隻**とあり、これは近隣諸港の中では第一であった。船の運航は駅の完成以降も利用され、自家用車の利用が増加し西海橋が開通する昭和32年頃まで続いた。

ハウステンボス方面から船で海路を進み、汐入の緩やかなカーブを曲がると眼前に景色が開け、早岐の町が見えてくる。雄大な隠居岳を背景に早岐神社のある愛宕山の麓に城下町のように町が広がっており、昔の人が見ていた商港早岐の姿を感じることができる。まさに港町として構築された町なのである。

九州商船会社 明治初年開業	明治初年度開業。早岐港（現在の中町、東町の海岸一帯）を基点として船を約30隻保有していた ＜航路＞ ①早 岐 ～～ 板ノ浦（現大瀬戸町）間 ②小値賀 ～～ 立串（上五島）間 （各奇数日正午発） ③大村湾沿岸航路
九州鉄道会社 明治30年～31年	大村湾連絡船 早岐駅が開業してから九州鉄道長崎線が全通するまでの約1年間、運航した鉄道連絡船。 ＜航路＞ ①早 岐 ～～ 時津港 間
交通船	赤子丸 早岐港から現南風崎付近までは、手こぎ船（漕ぎ手2・3名）で汽笛の代わりにホラ貝を鳴らし、信号をおくりながら、大手原、赤子など数力所を港として10人程のお客を乗せて運航していた。
渡し船 明治以前～昭和11年頃まで	観潮橋がなかった時代に、旧親和銀行早岐支店裏付近から戸迎まで渡し船が明治以前からあった。
発動船 昭和元年～昭和32年	大成丸 昭和初年から西彼針尾方面への運航を開拓し、昭和20年まで続いた 小川丸 早岐～～南風崎間 4.85トン 12馬力 船籍・・早岐町 赤子丸 早岐～～針尾間 4.50トン 10馬力 船籍・・宮小島 大亀丸 早岐～～下岳間 16.00トン 19馬力 船籍・・西彼亀岳 第5恵比寿丸 早岐～～大子（琴海町）間 14.43トン 35馬力 船籍・・長浦 第2久吉丸 早岐～亀岳～亀浦～風早方面 19.85トン 50馬力 昭和29年船火事にて焼失 観潮橋架橋で渡し船は廃業。昭和32年。西海橋開通で各発動船は次々に廃業した。

2. 遊 郭

早岐の遊郭は佐世保に軍港が開けた後の明治25年(1892)頃から出来始めたと聞く。それは、日清・日露の両戦争の勝利に酔った時代でもあり、景気も良く、真っ先に賑わったのが花柳界であった。田子の浦の一角にある小高い丘に月見町と名付けた遊郭が設けられた。その中でも特に有名だったのが**万才楼、三階楼、一楽、松鶴楼**の四軒であった。田子の浦町・西町にはそれを目当てにした飲食店。料亭が軒を並べて立ち並び、一日中、夜も昼も三味線の音が聞かれたのである。海には屋形船が浮かび、さながら不夜城の如き状態を呈し、二艘・三艘と提灯に飾られた舟からは芸者の弾く三味の音にも飾られていた。遊女達は大きな祭りともなれば晴れ着を着て三味線を鳴らし華やかに早岐の町を練り歩き、常に話題の中心で祭りの華であった。

当時のはやり歌がのこっている

「勝磯の鼻を廻れば田子の浦
むこうに見える、いずなず恋しきあの家は
今茂、松鶴、思案亭
遊びに行くならさっさと行け、さっとね。」

この歌と共に佐世保からやってくる時の海軍兵隊の姿が目に浮かぶ

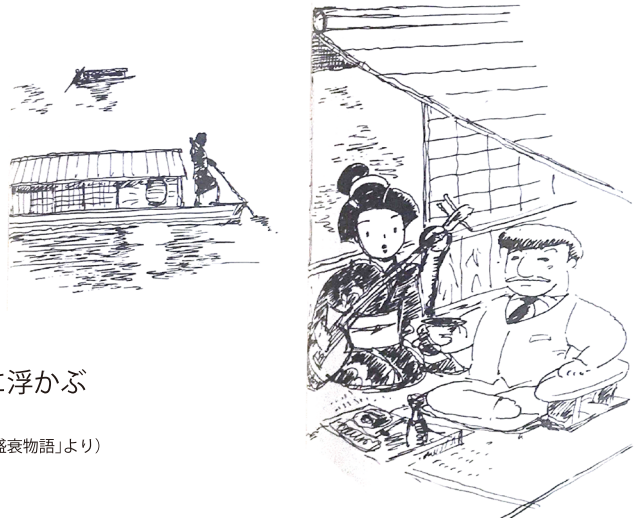
(早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より)



月見町遊郭券番組合蓮の七福神



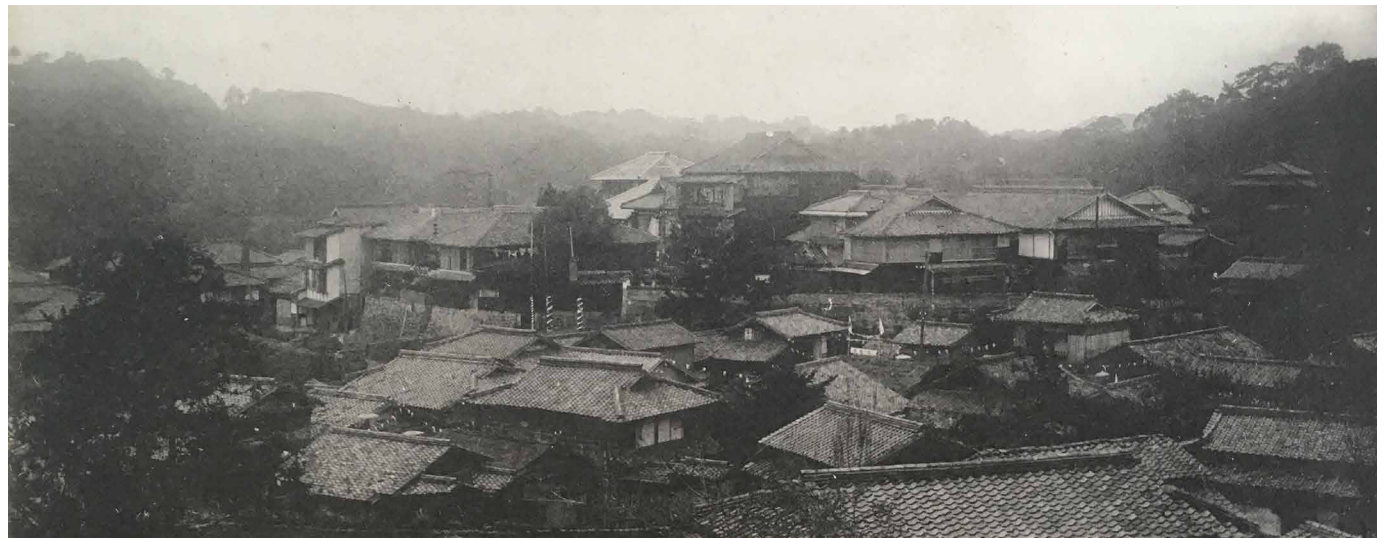
早岐遊郭・萬歳楼(大正4年)



しかしながら遊女たちの実情は華やかな生活とはいかなかったようである。遊女の多くは、今では考えられないが、親から借金の肩代わりに働かされていた。かなりの客を相手に稼いでも、そのほとんどが業者に取られ(一説によると遊女の取分は3割ほどだったという)家への仕送り、前借金の返済、病院代などで、手元に残るお金は多くはなかったはずである。

許可無く外出は出来ず、客がつかなければ劣悪な環境の格下の遊郭へ売られるという怖れもあった。おそらくは借金の返済が終わる契約満了の日が来るのをじっと待ち堪え忍んでいた女性がほとんどだっただろう。

早岐の繁栄の一躍を担っていた遊郭街ではあるが、商店街とはまた違った世界がそこにはあったようだ。



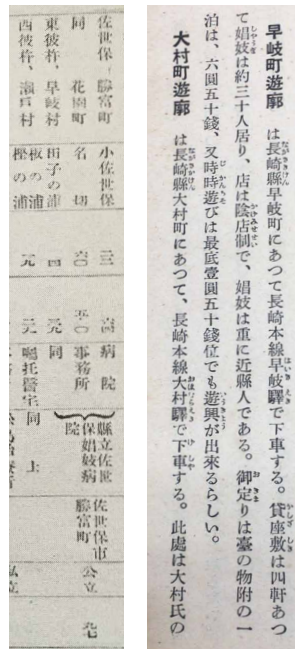
早岐神社境内より見たる遊郭全景

昭和4年9月に発行された「**日本遊里史**」の付録にある日本全国遊郭一覧には東彼杵、早岐村の田子の浦として紹介しており、貸座敷数**4軒**娼妓数**39人**と書かれてある。また、昭和5年7月に発行された「**全国遊郭案内**」には早岐町遊郭と紹介しており、「貸座敷は**4軒**、娼妓は約**30人**、店は陰店制で娼妓は主に近縣人である。一泊は**六圓五十銭**、時間遊び(1時間半ほど)は最低**壹圓五十銭**くらいでも遊興ができるらしい。」と書かれてある。

しかし早岐の古老の話によれば、実は早岐の遊郭は田子の浦だけではなく、現在の潮入橋から小森橋までの川沿いに7軒ほどの遊郭が並んでいたそうである。しかしそこは田子の浦よりも比較的安く入れるところであり、田子の浦ほどの華やかさはなかったということであった。それらを加えると実際の早岐周辺の遊郭の数はずっと多かったのかもしれない。

※1 娼妓＝一般的に遊郭で働く女性のこと

※2 陰店制=発祥時の遊郭は往来に面した格子の向こうに娼妓が並んで客を待つ「張店制」だったが時代が経つにつれ人道上の問題から、遊女が往来に面した場所でなく、家の奥の方に並ぶ「陰店制」が多くなった。



早岐の遊郭は軍港が開けた後の明治25年(1892)に創り始められ、売春防止法により昭和33年(1958)に廃止されるまでの約66年間続いた。ちなみに私の祖母も遊女を見た記憶があるという、祖母は吉井の人間だったが学校で知り合った友達の家遊びに行ったその先がたまたま遊郭を営んでいた家で、一階の窓越しに座っている着物姿の女性の姿が印象的だったという。今年90才の祖母が16才の時なので今から74年前の昭和18年頃の話である。

最近まで遊郭街跡地の入口に石の柱が二本あった。遊郭の入口を示す門柱であり、唯一の遊郭の名残であったが、近年壊されてしまった。以前はこの2本の柱の上部に「早岐楽園」というアーチ状の看板が掲げてあったそうだ。長崎新聞の記事によれば「昭和9年4月1日。早岐の月見遊郭が「早岐楽園」と改称、娼妓を「園妓」と呼ぶことにする。」としてあるので、この時期に掲げられた看板だと思われる。



遊郭跡と思われる建物(早岐3丁目にて平成18年撮影)
現在はもう無い



撤去される直前の石柱(早岐3丁目にて平成25年11月10日撮影)

3. 祭 事

くんち

祭としては、7月の「**祇園祭**」に始まり、10月の早岐神社の**祭礼供日**には町に仮社が設けられ、そこで神様は二夜を明かされるのである。神様が降りられる日を「**お下り**」、帰られる日を「**お上り**」と言って今でも続いているが、昔は決められた祭町が「**ニワカ**（七福神、武者、農民などの様々な仮装をして町を練り歩く）」を出して祭りを盛り上げ、実に盛んなものであった。

第一日目、中日共に街は祭一色に彩られ各部落からの人出で町中大賑わいだったのである。夜は各店が店頭「店の誇り、あるいは自慢」として、店の商品を使った**店頭ニワカ**を飾り、客寄せを競いそれは又、投票によって優勝が決められることで、その趣向は益々増幅していったものである。

（早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より）



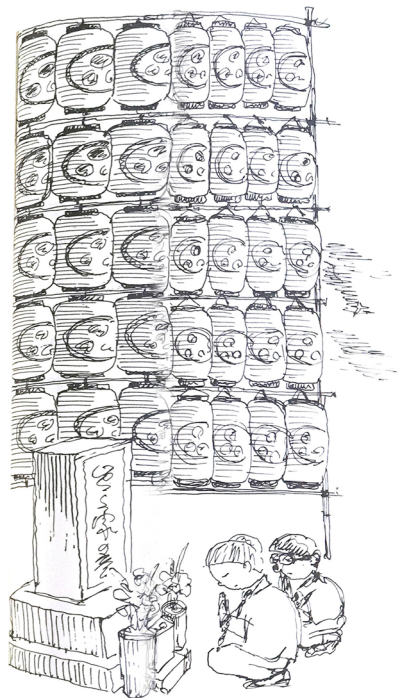
中町の仮装行列



佐世保新報早岐支局前の雑踏

お盆

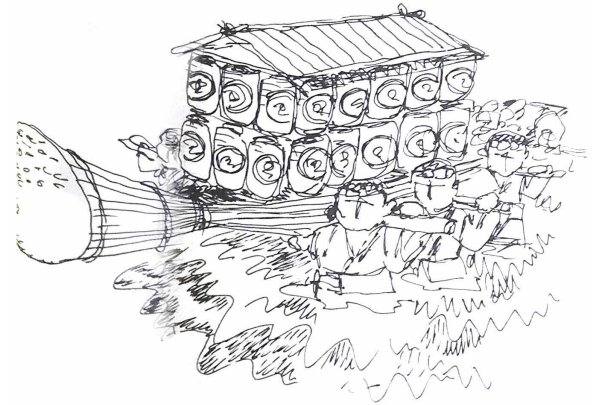
8月の盆の行事は「**徳丸墓地の盆祭**」として、長崎の盆祭に次ぐものとして世に知られ、3万の石碑がある墓地に、初盆にあたる家では13日から18日まで、一列に10個から12個の特別張りの家紋を入れた灯籠を少ない家で5段、多い家では9段から10段のものを飾り、家族の人たちが10人、15人と、午後7時頃から11時、12時頃まで御馳走を持ち込み、おつとめを果たしたものである。なかでも15日の夜は、故郷を遠く離れて暮らしている人も家族揃って帰省し、祖先の墓に灯籠を捧げ、また久方振りに面談する親類、知人の墓にも詣で、墓地の道は人でごったがえし、沿道にはスイカ、ウリ、アイスクリーム、菓子、花火等の出店で賑わったものである。



また、夜半12時から1時頃になると、早岐瀬戸の流れは干潮の流れと変わり、西方浄土への途が開かれたとして、人々は瀬戸近くに集まった。特に初盆の家では、5メートル、8メートルもの麦わらで作った精霊船を用意し、外観を提灯一色で飾り立て、船の中には花、果物などの供え物を満載し、東町・中町・西町の海に浮かべ、精霊船を用意した家の親類知己（しんせきちき）の若者たちが威勢の良いかけ声と共に、一斉に海に飛び込み、船に乗って西方浄土へ旅立つ仏の伴として流れゆく姿は見物する人々に仏と明かりと舟と人と、そして潮とが、渾然一体となって視野から消えていく映像が、あたかも人生の縮図であるかの如き感動を覚えさせ、知らず知らずのうちに手を合わせる人々でうずまったのである。

初盆の家では、仏が西方浄土に着かれるのが18日であるということで、その日まで、墓地には灯籠の明かりは灯し続けられ、その明かりが消えると共に盆の祭りは終わりを迎えるのである。

（早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より）



夏祭り

盆が終わると、近郊部落の夏祭りが始まる。これが又、早岐の町を発展させる糧となるのである。料理を用意するにも何をするにも、用意するものの材料をあがなうことが出来る所は早岐の町以外にはなかったのである。今のようにバスがあるでなく、佐世保に行くにしても2時間に1本しかない汽車を利用するしかなく駄菓子屋さえ上原に「万太郎屋」「はさみ茶屋」という茶店があった位で、すべて早岐の町に頼らざるを得なかった。

（早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より）

■早岐近郊部落の夏祭り

祭 日	祭 神	浮 立	
8月16日	陣之内乙姫神社 ^{おとひめ}	有り	（現在は途絶えた）
8月18日	下苗手薬師寺 ^{くだるのて} （今の早苗町）	有り	（現在は途絶えた）
8月21日	上原浄漸寺薬師如来	有り	（現在も行われる）
8月24日	権常寺天満宮	有り	（現在も行われる）
8月27日	重尾不動祠 ^{ふどうし}	有り	（現在も行われる）
9月1日	浦川内地神宮 ^{じじんぐう}	有り	（現在も行われる）

このように笛の音と共に金、太鼓の音で8月中の夜は更けていった。

他にも、冬には大晦日、初詣、七日正月、恵比須講。春には水神祭、八天神社祭、早岐神社や勝磯の桃山での花見。等々、行事ごとは一年を通して行われ、その都度、祭りに宴会はつきもので、その料理の材料などはすべて早岐の町にて買い求められ、それが町の発展の原動力ともなったのである。



権常寺天満宮のお祭り（平成28年8月24日）

4. 市

茶市

茶市の始まりは400～450年ほど前からだといわれている。
天明8年(1788)平戸藩が幕府に出した報告書には早岐の「市」が開かれていた日が書かれている

	四月	八日	お釈迦様の誕生日＝灌仏会(かんぶつえ)
	七月	八日	文殊菩薩の縁日
	十二月	八日	お釈迦様が悟りを開いた日＝成道会(じょうどうえ)
	十二月	十八日	観音様の縁日

つまり当時は寺の縁日に合わせて行事に集まる人々に寺の門前で生産物を持参し、物々交換をしていたと思われる
いわゆる「**門前市**」から今の早岐茶市は始まったようである。
明治時代になり、現在のような日程になったと思われる。

早岐茶市がもっとも盛んだったのが、幕末から明治時代の中期の頃といわれ、瀬戸には**600隻**からの舟で埋まったという。早岐の商人は茶市で1年分の収入をかせいだともいわれるからその盛況ぶりが伺える。
海の向こうの上五島からは五張櫓、八張櫓の和舟が海岸に100隻以上はひしめき夜を明かし、海産物を「市」に並べる。嬉野・彼杵の人は新茶を並べ、三川内・有田の人は陶器を並べ、遠くは八代(熊本)・久留米から畳の上敷としての「花ゴザ」を並べ、また色々な地方の人は多種多様の食物から日用品迄並べて物々交換、金銭取引をしていたのである。町のまちこちにある空き地には日本全国を廻る興行師が見世物と称して、あらゆる催物を仮小屋を立てて開いていた。これらの興業は「美しき天然」のラッパの音で近郊在住に知らしめられ、人出を誘い「ノゾキ小屋」「サーカス小屋」「ガマの油」「バナナの叩き売り」等々として、夜は「芝居小屋」として「金色夜叉」等の新派劇^{※1}(しんぱげき)などが演じられた。小学校も8日・18日・28日の「市」の中日は休みとなり、海の向こうの上五島の児童も「お茶の市」に出かける者は欠席とはならなかった。こうして大人も子供も町の中に満ちあふれ大いに賑わった「茶市」があった。 （早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より）

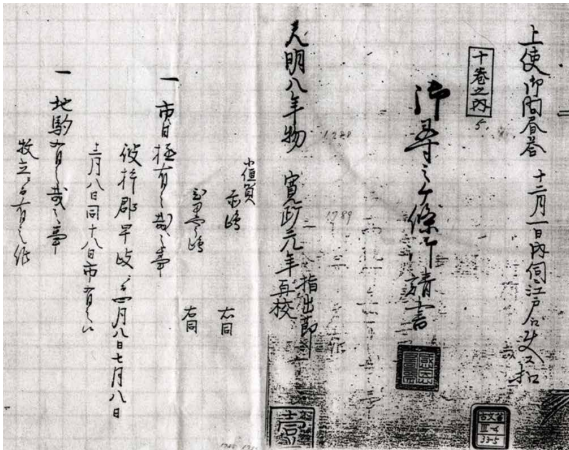
※1 新派劇＝明治中期に自由民権思想普及の手段として発生し、のち歌舞伎と対立し、また新劇とも一線を画して、大衆的な現代劇として発展した日本演劇の一形態。単に新派ともいう。

牛市

早岐には早岐牛市も設置されていた。大衆的催しではなかったため、あまり知られていないが、早岐の町の賑わせるためには茶市以上の役割を演じた。明治の末期から大正時代にかけて、都会は舶来趣味に覆われ、その一つが牛肉を食することであった。その時、有名になったのが今もその伝統を引き継ぐ神戸牛である。
当時、地方では牛肉を食することには慣わしがなかったので、なかなかなじまなかった時代であるが、時の流れはいよいよ地方の都市へも拡がりかけて来たのである。

その時代、九州に市政が敷かれていた都市が5つあり、福岡、長崎、佐世保、鹿児島、熊本であり、人口10万人以上の都市は、福岡、長崎、佐世保で、その佐世保市に牛肉屋は松尾店1軒という時代だから、今の人にとっては想像もつかないだろう。その肉牛は黒牛に限られていた。その黒牛の産地が五島で、五島牛の名で知られていた。このことにいち早く先見の明をつけたのが、早岐の旧家の次男で豊村繁二(とよむらしげじ)という人物であった。

茶市等で五島との関連が深かった早岐の港を利用して、五島牛を取引する市場を大々的に陣の内の自分の土地に建設し、市場にはその一切を責任をもってとりしきる原弥吉という一家を常駐させ、取引一切を担当する事務所を設け、馬渡獣医、坂口書記が専住して、牛の健康の管理と取引一切の事務を行い、手伝いの女の人達が立働き、牛買商人として、福岡安治などが出入りしていたのである。

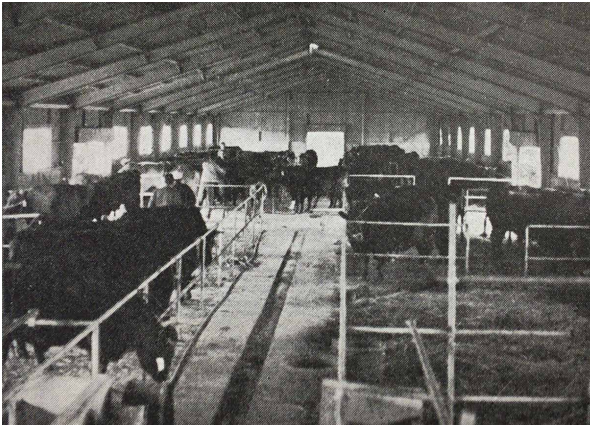


(平戸松浦史料博物館蔵)

徳川家斉(いえなり)の11代將軍就任にあたり、慣例によって平戸藩に幕府の使者が来て、藩内の様子を質問した。(天明8年・1788)上記はその一部で、市の日を決めているかとの質問に対して彼杵郡の早岐で、四月八日、七月八日、十二月八日、同十八に市を開催していると記している。

こうして、大阪、京都、神戸、広島の牛商人の誘致を企画したのであるが、この計画は見事的中して、**毎月三回、10日おき**にくり返される九州第一を誇る取引には**200人**を越す牛商人が来る「牛市」となった。

舶来風指向趣味の時代に乗った肉牛の取引によって儲かる商人達、それを相手とする早岐の料亭、飲食店、花柳界の経営者達は、首を長くしてこの牛市を待ったものである。取引された肉用の牛は、広島より東は貨車で輸送され、佐世保、伊万里、武雄、佐賀の肉屋送りは、百姓の人達が一人二頭まで引いて牛肉屋まで運で行ったものである。
今まで牛肉を食すことに馴れていなかった早岐の町でもいち早く他の地区に先駆けて、料亭、飲食店、旅館で、すき焼きの美食を味わう人が多くなったのである。
今思えば牛肉を食べることは当たり前だが、当時牛肉の行く末を見極めた先見の明が豊村繁二を始めとする早岐の人々の中にあったことを証明するものであろう。



江上に移転した早岐家畜市場

魚市

年に1度の「茶市」、月に3度の「牛市」と早岐の町の活性に欠かすことの出来なかった「市」の賑わいがあった。これらの市と共に、まさに毎日の経済活動の出発としての「市」として「早岐魚市」があった。

朝四時から中町海岸に「活きのいい魚」を持った近海の漁船がひしめき、威勢の良いかけ声と共に多くの仲買人との間に「せり」が始まるのである。
仲買人の手を得て小売人は有田、三川内近郊の農家を毎日売り歩いたものである。農繁期、猫の手も借りたいとき、毎日の食膳を潤してくれたのはこの小売商人達であった。



(早岐の街百年「栄枯盛衰物語」より)

毎日開かれる「**魚市**」毎月開かれる「**牛市**」毎年開かれる「**茶市**」、これが早岐の町の活性の源となっていたのである。

競馬

娯楽になるが、人が集まる要因となることのひとつに早岐競馬があった。大正14年(1925)11月4日に第1回競馬大会が開かれている。これは早岐商工会と東彼杵郡畜産組合の共催で権常寺競馬場で実施された。昭和8年(1933)11月9日第17回までの9年間、春と秋の年に2回(たいてい各4日間)に開催されていた。馬の走るコースは現在と同じ楕円形だが800mと距離は短かったようである。馬も騎手も期間中だけ、東彼杵一帯から集められ、人々は今と同じように馬券を買いレースを楽しんだ。入場料が必要で、競馬場の周囲(北側)には竹垣を組みムシロを並べて吊し、外から覗かれぬようにしていた。当時県内での競馬開催はほとんどなく、かなり広域から客を集め順調な業績を示したらしい。付近の住宅には、当時集められていた馬を一時預かっておくための柵木の一部とされる、穴のあいた柱が今も残っているという。
競馬場の場所は昭和6年(1931)に権常寺免から宮崎免(現在の広田小学校南側)に移り、さらに昭和11年(1936)に大村に移転し、昭和14年(1939)の「軍馬資源保護法」公布により廃止されている。ちなみに長崎県では諫早競馬場が昭和29年(1954)に廃止され、競馬場は途絶えている。

(「佐世保知る識る百科」吉永満さんインタビューより)



現在の早岐競馬場跡地(平成29年10月)



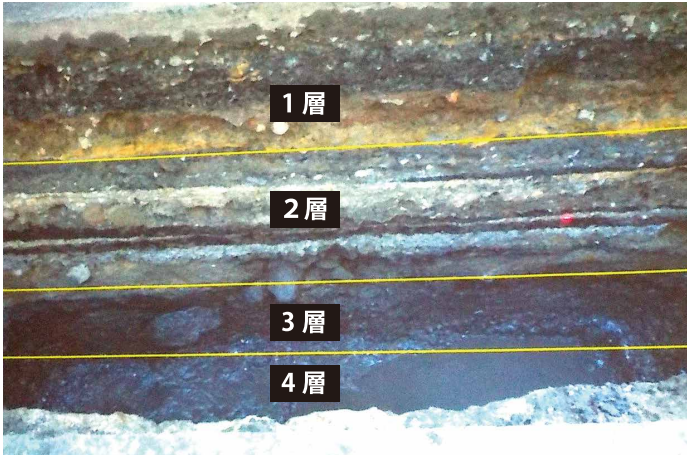
移転した大村競馬場(昭和13年)

5. 災 害

早岐で災害と言えば水害と火事だろう。特に火事は記録に残っているだけでも江戸時代到大規模な火災が3回起き町のほとんどが焼土と化している。明治39年に町は再び大火に見舞われ、東町・中町・西町のほとんどが焼き尽くされ、大念寺・西蓮寺の寺院には及ばず沈火したという。以前は西蓮寺山門にその時の焼跡を見ることができたが、現在は建て替えられている。この明治に起きた大火によって新たな区画整理の下、現在の東町・中町・西町の町並みは出来た。

平成26年から27年にかけて佐世保市教育委員会が行った「早岐瀬戸遺跡発掘調査」の報告のなかで「**1層目に明治期の火災層、2層目は17世紀後半から19世紀までの火災面及び整地層である**」としており文献記録に残る火災面が確認された。

延宝1	1673	早岐大火、西蓮寺等焼失 (西蓮寺境内、山門再建記念碑文より)
宝永4	1707	宝永地震による被害を受ける
延享3	1745	早岐大火、家屋150戸焼失
宝暦8	1758	早岐大火、家屋194戸、土蔵4戸焼失
		}
明治39	1906	早岐大火、商家40戸焼失



佐世保市教育委員会調べ

八天神社

有福町のクレールの丘と呼ばれる住宅地の頂上付近にある汐見台第一公園の脇に八天神社が祀られている。この神社の成り立ちはあまり知られていないが、実は早岐の町と大きな関わりがある。火事の多かった早岐商人の有志が集い、**火防の神**で名高い佐賀の**八天神社**から御分霊し、瀬戸の対岸の戸迎山の頂上に早岐の町を見下ろす形で祠を建て、早岐の町を火災から守ってもらおうと祀ったものであった。昭和の頃まで八天神社春の祭りが行われ、4月16日になると早岐の有志一同が山を登り参拝していた。その頃の戸迎山は緑美しい山で、頂きに一本松がそびえていた。そこからは早岐の港が一望でき、絶好の展望所であった。目次で掲載している写真は八天神社から撮ったものである。

昭和40年後半から宅地造成工事が始まり山の頂上は削りとられ、その時に八天神社も移動され、しばらく放置されたままであった。それではよくないということで昭和59年に造成工事が完成した地に再び再建することになった。ところが再建当初、祠は従来の向きである早岐の町を向いておらず、早岐に背を向けてしまっていた。これはいかんと早岐の住人が本来の向きに直すべきだと抗議して向きを直させたという逸話が残っている。住宅地に埋もれ現在の八天神社からは早岐の町は見渡せないが、確かに早岐の方角を向き今でも静かに見守っているようであった。現在では早岐神社の末社として祀られている。

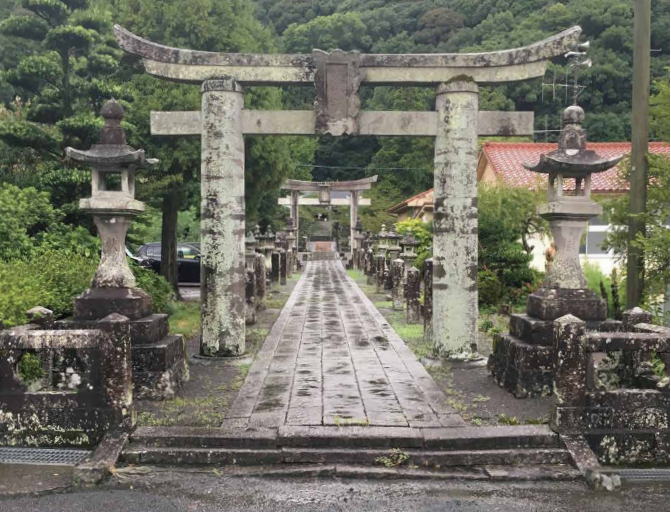
現在クレールの丘の八天神社にある石塔群の中の確認できる限りの一番古い年代は脇にある小さな祠の裏に**明治10年**と彫られている。別の唐泉山と大きく彫られた石柱の裏には明治11年と彫られ、鳥居には建立年を明治15年と彫られている。また別の常夜灯と彫られた石塔の側面には明治16年と彫られてもいる。

本社である嬉野の八天神社には早岐の商人が寄贈した石塔がある。本殿に続く長い参道には肥前各地から寄贈された石塔が並んでいる。一番手前にある鳥居の両脇に建つ大きな石灯籠にそれはあった。正面向かって右の石灯籠には「**願主 早岐浦前川〇〇**」と彫られ、左の石灯籠には「**施主平戸領早岐講中**」、「維持 **天保四年**歳〇〇」と彫られてあった。

有福町の祠と八天神社の石灯籠とに年代に差があるのはなぜだろうと思い、御分霊した年代がはっきり分らないかと八天神社と早岐神社に問い合わせてみたがどちらも記録が残されておらずはっきりとした年代は分からないということであった。

只、佐賀の八天神社の石灯籠に彫られた天保四年(1833)の文字が示すとおり、早岐住人の八天神社に対する信仰は江戸時代から行われており、それは明治10年から16年頃にかけて建立された神社によって形となり、大正から昭和にかけて早岐の住民達の手によって大切に信仰されてきたことは確かだった。

江戸時代の度重なる火災に悩まされ、火難鎮除・家内安全を願う早岐住人の切なる思いが伝わってくる。



八天神社(嬉野市塩田町)手前左右の大きな石灯籠が早岐講中寄贈

龍吐水(りゅうどすい)

早岐1丁目にある「こぼと幼稚舎」の前川さん宅には**龍吐水**なるものがある。これはもともと大念寺の床下にあった物を郷土史家である前川雅夫氏が譲り受け、保管していたものである。当初は痛みがひどかったので、木の部分は浦桶店、鉄枠は鈴山鉄工所にて復元し(昭和63年11月末)、現在も大切に保管してある。

以下、前川氏からの説明文より抜粋

<由来>

江戸時代の龍吐水には大小ありますが、これは大型のものです。**早岐 中町**と彫られているので、中町の住民団体が使っていたものと思われます。

メーカーは「**大阪阿波座戸尾町三丁目 井上利兵衛**」「**本家**」「**納**」の焼印もあります。大正、昭和の鉄製の手押しポンプは数多く残っていますが、江戸、明治の木製のものは珍しく、県内には雲仙市の旧有明歴史民俗資料館にもあります。ただし、長さ1m程の木の筒先がなくなっているのは両方とも同じです。

<使い方>

この消化器の使い方は初期消火と延焼防止です。家の家事は台所や暖房器具、タバコの火などが原因ですが、火がついて燃えだし、天井に火がつくほど大きくなるまでが約15分。この15分間に消すのが初期消火です。

木製の龍吐水は大人2人で運び、バケツリレーで水を入れ、筒先を動かして使いました。放水すると二階建ての屋根に届くほどでした。

初期消火ができず、天井に火がつくと、次の15分で家は燃え上がり、焼け落ちます。こうなると昔はその家の消火を諦め、周りの家に水をかけて延焼をふせぎました。このときにも龍吐水が活躍しました。それでも消せない、周りの家を次々と壊し、空き地をつくって延焼を防ぎました。

復元前には黒く焦げた部分があったことから、明治39年の大火の際には実際に使われていたと思われる。この龍吐水は今となっては貴重な当時の火事現場を見た、物言わぬ生き証人である。



6. 観潮橋と名島公園

奈良時代、和銅6年(713)に編纂された肥前国風土記に早岐瀬戸と思われる記述が見られる。そこには風土記が編纂される650年程前の早岐瀬戸の様子が記載されている。

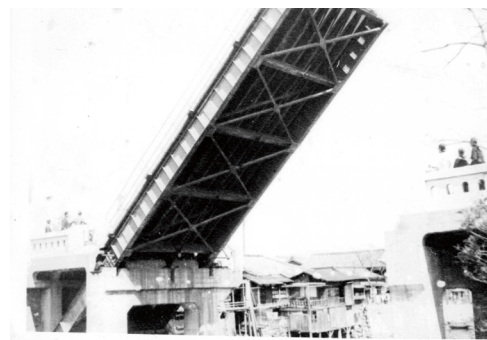
この門に潮がくるのは、潮が東に落ちれば、西に湧き上がる。
湧く音は、雷の音と同じである。よって速来門という。
また繁った木があり、もとは土について、枝先は海に沈んでいる。
海藻の生育が早く、朝廷への献上物としている。

その幅が狭いことで知られる早岐瀬戸だが、瀬戸の幅は時代によって変化している。もっとも古い江戸初期に描かれた正保絵図(1647)には「針尾ト早岐トノ間狭所にて拾七間」としてあり瀬戸の幅は**35m**と書かれてあるが、江戸末期に作成された「平戸領地方八奇勝図」には「狭き処五、六丈」とみえ、幅は**20m**に幅狭している。八奇勝図に描かれている突き出しを造営したこと起因していると思われるが、これはおそらく延宝1年(1653)に行った町田原干拓以降の時期に行った工事の一環であり、勝磯の一丁突き出しも同時期に造営されたのではないと思われる。この突き出しの造営により、干満時の溢水を緩和できるようになり船が停泊しやすくなった。

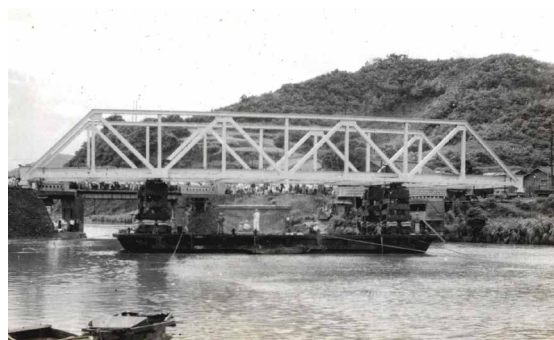
風土記で描かれた頃の早岐瀬戸はまだ幅が広く、突き出しもなかったので干満の差で大量の水が流れ出るその様は文中で表現されているように雷の音の如き激しさを見せていたのかもしれない。

その後昭和11年(1936)突き出しの真上に開閉橋が架橋された。これは当時帆船が入港していたためであり、早岐側の突き出し付近に開閉に使用する巻上げ機室があった。帆船が入ってくるたび、橋近くに住む松下某氏がかけつけて巻上げ機を操作して開閉していたという。

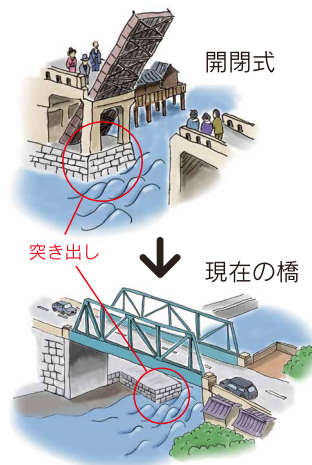
やがて機帆船の入港も激減し、昭和29年(1954)に道路の整備また西海橋の架橋に伴い、開閉橋に平行して拡幅された橋が新たに架橋され、開閉橋は撤去された。おそらく開閉橋が架橋された時の工事の際に元々の突き出しの上にコンクリートが舗装されたのだろうか、もしくはその後の護岸工事の際か、現在の瀬戸の幅は江戸末期の「平戸領地方八奇勝図」に書かれた20mから更にみじかくなり、**約10m**という世界でも珍しい幅の狭い海峡となっている。



開閉橋



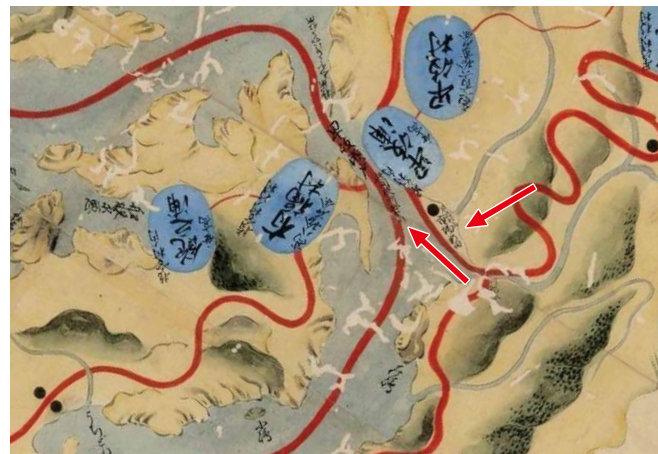
観潮橋架橋工事(奥にこのあと撤去される開閉橋が見える)



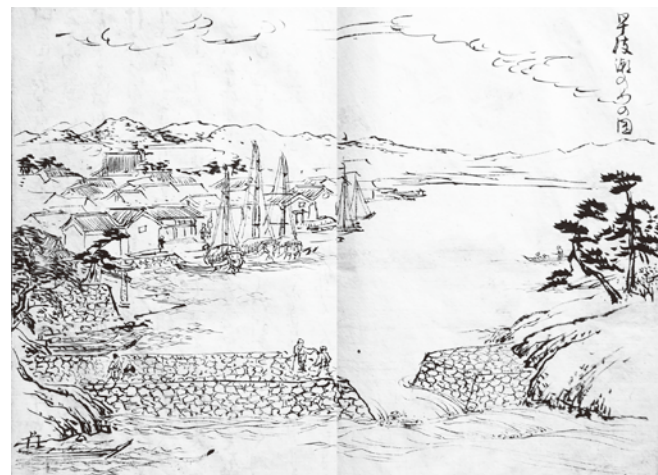
<時代ごとの早岐瀬戸周辺の絵地図>



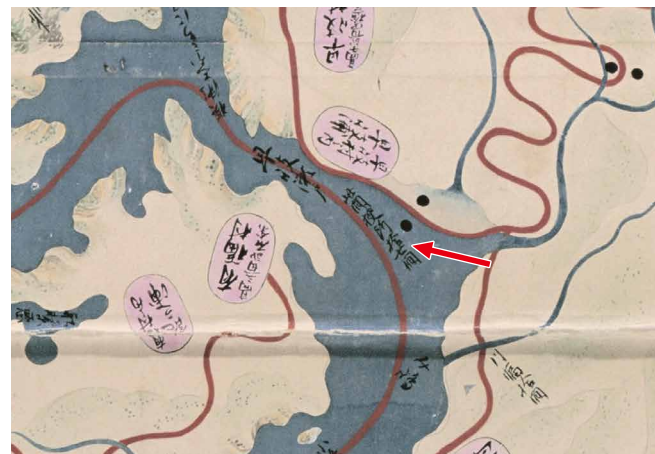
●正保4年(1647年)作成の絵図は「針尾ト早岐トノ間狭所にて拾七間」と書いてある。拾七間(17間)＝約35m。
町田原干拓以前のもっとも古い早岐の海岸線が確認できる絵図



●元禄12年(1699年)作成の松浦舌岐守領分絵図でも「狭き所は拾七間」としてあり、新しく「市場新田」と表記された場所もある。町田原干拓による埋めたて地だと思われる。



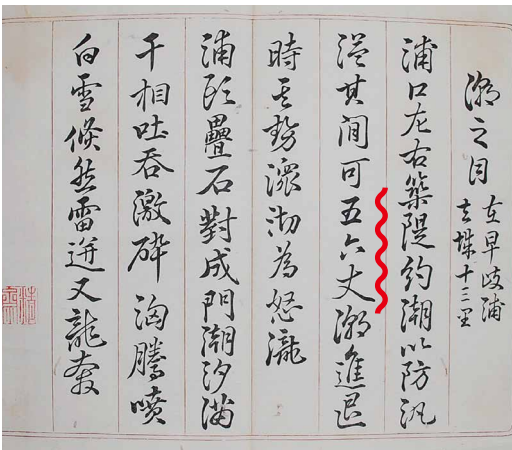
●享和二年(1802年)奥島家文書「南遊紀行」で描かれた早岐瀬戸
この頃にはすでに突き出しがあり、左手前には七郎宮の鳥居も見える



●天保9年(1838年)作成の天保国絵図肥前国では狭き所は拾七間(17間)としてあるが、細かいところは調査せずに元禄12年の絵図を書き写した可能性がある
この頃には突き出しができており瀬戸の幅はもっと狭かったはずである。

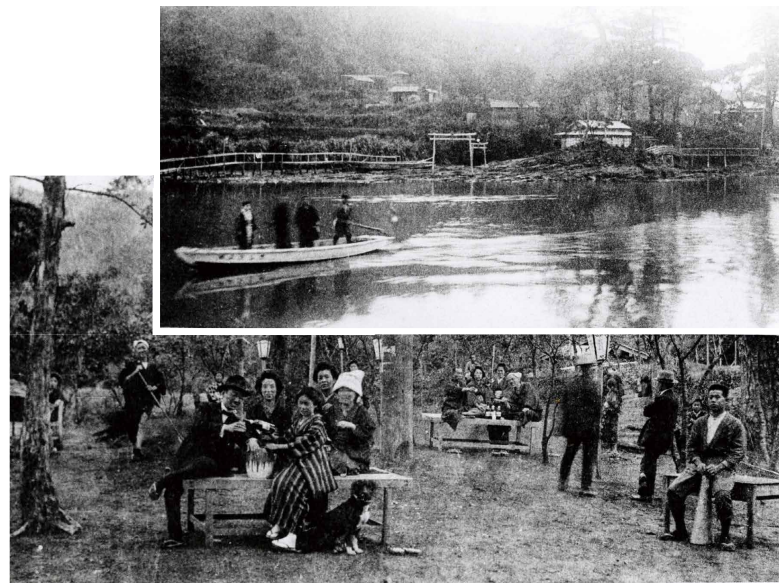


●嘉永元年(1848年)平戸領地方八奇勝には狭き所五六尺(5、6尺)＝約20mとある



明治期以降になると瀬戸の針尾島側に名島公園ができた。公園内には「琴乃家」という料亭ができ、芸者がお客をもてなした。そこでは潮の激しさを鑑賞する**観潮会**も行われ、潮止まりの時は渡し舟や芸者と客を乗せた屋形船が行き交う風光明媚な観光名所となった。

その後、国松という木造三階建ての立派な料亭が建ち、現在の潮音荘へと引き継がれている。近年カヌーの聖地として日本中から瀬戸の急流に魅了されたカヌー愛好者がやって来て盛り上がっている。風土記が速来門と書いた時代から、平戸八景となった江戸時代を経て、大正時代には名島公園ができる。いつの時代も人々を魅了してやまない瀬戸の急流を、今後私たちはどう活用していくのかに早岐の活性化の鍵があるのかもしれない。



名島公園



琴乃家